

---

# 孤高の翼

逢月ナナミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤高の翼

### 【コード】

N8662Y

### 【作者名】

逢月ナナミ

### 【あらすじ】

跡部VSリョーマ最終決戦。連載当時跡部のリストバンドの扱いがどうしても解せなかった為に書いたお話です。

あれほど煩かった鼓動が、息遣いが、すつと軽くなった。見えない糸でコートに縫い付けられていたかの如く重かった足も解放された。

タイプブ레이크。

ギリギリの境界線。

その内と外との繰り返し。

それはむかつく程に生意気な青学1年との死闘の最中。

だが、軽くなったその身体には得も知れぬ充実感が広がって、その矛盾を疑問に思う跡部の思考さえ麻痺させてしまっていた。

これまでのどんな試合にも感じたことの無かった充実感は、跡部の身体から急速に闘う力を奪ってゆく。

跡部景吾はその人並外れた才能故、常に満たされることが無かった。氷帝テニス部の頂点を極めた部長であり、およそ200人も部員を総括するその責任が、跡部のその心の奥深くで渴望していた『己の限界を究める戦い』を許さなかった。

常に勝利し続けることこそが氷帝テニス部の部長として、また正レギュラーとしての最優先事項であり、その為には1分の隙も容赦も無い、完璧で冷徹なプレイを続けなければならない。

跡部の天賦の才あってこそ成せる技、相手の弱点を見抜く”インサイド”や、相手の打ち返す術さえ奪い去る2段スマッシュ”破滅へのロンド”もその最優先事項を達成する為だと言っても過言ではない。

勝つ為の主導権を握る為ならば手段を選ばない。

それは跡部自身が自ら選んだ戦い方だったが、いつの頃からか少しずつ積み重ねられた心の葛藤があったことは否めなかった。

跡部が初めて全力でプレイすることの出来た相手は青学テニス部の部長である手塚国光だった。

死力を尽くし、互いを称えあい、唯一無二に戦いだったと誇れるその試合はかけがえのない1戦となったが、その時初めて味わった充実感が跡部の中に燦る気持ちと葛藤を残した。

そんな燦った気持ちだが、今は霧が晴れてゆく様に消えてゆく。

『俺が求めていたのは、この瞬間だったのか』

今まで己を縛っていたリミッターを全て外した戦いをした為に、これまであれほど自分の中で拘っていた勝利の意味までが揺らいでいく。

『何もかも忘れてようやく手に入れた充実感に身を委ねたい』

そんな跡部の薄れゆく意識の中で、微かに疼いていたものがあつた。その微かな疼きは静かな水面に落とされた一滴の波紋となり、やがて大きなうねりとなって跡部の胸に迫る。

「氷帝！氷帝！氷帝！氷帝！氷帝！」

これまで誰にも明かすことはなくとも、跡部が守ってきたものがそこにあつた。

絶え間なく続くそのコールに伝えてこそ、この充実感を完璧に手に入れることができる。

『俺の戦いはまだ終わってはいない』

薄れていた意識を取り戻すと、自分がコートに倒れこんでいたことを把握した跡部は思いついて右手首のリストバンドをむしり取る様に外す。

その性分故に暴走しそうになる自分を押さえつけ、氷帝の部長で在り続ける為の証だったものだった。

だが、もうその必要は無い。

今こそ己の思うまま、背負ったものの為に最後の全ての力を振り絞る。

跡部はもうあまり感覚の残っていない手でグリップを握りしめると、渾身の力を込めて立ち上がった。

途端に湧き上がる歓声。叫び。

その声に応えるべく、跡部は持てる精神力の全てを総動員して態勢を整える。

『この試合だけは何を引き換えにしても勝つ！』

そんな強烈な想いだけがすでに限界を超えた跡部の全身を支えていた。

ほとんど無意識のままベースラインまでバックすると、まだ決して根を上げる筈の無い目の前の倒すべき者が繰り出す次なる攻撃に備える。

『いつまで寝てやがる！さっさと起き上がれ！』

跡部の心の叫びが伝わったのか、越前リョーマはゆっくりとその場にた立ち上がった。

よろけながらもしっかりとしたサーブのモーションが跡部の霞んだ視界に映った。

「俺は青学の柱になる！」

そんな叫びとともに待ちかねた次のサーブが迫る。

跡部は不敵に笑うと氷帝の部長として、最後の止めを刺すべく…。

「青学の柱はこの跡部景吾が叩き潰してやるぜ！」

氷帝テニス部の誇り高き帝王、跡部景吾。

跡部はその最後の瞬間まで帝王であり続けた。

(後書き)

もう少し続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8662y/>

---

孤高の翼

2011年11月25日23時49分発行